

3 障がい者の人権

平成 28 年 7 月 26 日、津久井やまゆり園にて痛ましい事件が起きました。この事件を受け、平成 28 年 10 月 14 日に「ともに生きる社会かながわ憲章」が定められました。その中で「私たちは、障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します」とあります。障がいのあるないに関わらず共に生きるために、当事者の思いを知ることはとても重要です。ここでは、当事者の思いにふれ、共に生きる社会の実現のために、今の自分たちに何ができるか考えていきましょう。

ワーク 1

津久井やまゆり園事件について、知っていることを書きましょう。

ワーク 2

次の文章は、自閉症の当事者である東田直樹さんが自身の思いをまとめた著書「自閉症の僕の七転び八起き」から抜粋したものです。文章を読んで著者の思いを知り、質問に対して答えてみましょう。

自閉症者の孤独

自閉症という言葉には、自分を閉じ込めるという印象があると思います。でも、それは間違いです。確かに、自閉症者は人と関わるのが苦手ですが、心はいつも、外に開いています。もしも、本当に心を閉ざしていたら、奇声を上げることも、パニックになることもないでしょう。それは、感情が表に出ている証拠です。心が閉じていても、開いていても、そんなことどちらでも構わないと思う人もいるかもしれません。でも、それでは、だめなのです。自閉症とは心を閉じている障害ではないという事実を、みんなに知ってもらわなければいけないからです。自閉症者は心を閉じているために、人と関わらないのではありません。開いているのに、気づいてもらえないので

す。外に出るためには、人の力が必要です。どうか、僕たちに、この社会で生きるための力をかけてください。

話せない自閉症者の孤独について、僕は陽が昇る前の暗闇のようだと、いつも思っています。希望は、すぐ側にあるのに、夜が明けることなど、まるで想像もできないからです。みんな、話せない自閉症者がどれだけ孤独か、きっとわかっていません。考えてみれば、人は生まれてから死ぬまで、誰もがひとりなのです。すべての時間や思いを共有できる人など、存在しません。他の誰かとつながることで、自分はひとりではないと思い込むのではないのでしょうか。そういう点から考えると、話せない自閉症者は、最も孤独な人になります。しかし、もともと人は孤独なものだと割り切ることができるのであれば、それほど特別な存在ではないのかもしれない。孤独な人にも、思い出は平等に残ります。言葉でうまくつながれなくても、人を愛したり、人から愛されたりした経験は、その人の心の中に大切な記憶として、刻まれるでしょう。自分が本当に孤独だったのかどうかは、死ぬときわかるのではないかと、考えています。

話せない自閉症者は、誰とも心を許し合うことができないと、心配している人もいるでしょう。話せないのだから、胸の内をわかってもらえないのは仕方ないことです。それは悲しい現実ですが、それほど悲観することもないのではないのでしょうか。なぜなら、心の中にも友達はつくれるからです。自分であって自分ではない人間が、心の中にすんでいるのです。僕はまるで、親友のような自分に楽しいとき、悲しいとき話しかけます。だからこそ、自分のことを嫌いにならないでほしいのです。自分のことを嫌いになったら、心の親友も失ってしまいます。理想の自分には、ほど遠いと感じている人が、自分を好きでい続けるのは難しいことです。話せない自閉症者に「あなたのことを好き」と伝えてあげてください。人から好きと言われることで、自分でもずっと好きでいられると思います。

誰でも辛いのは、誤解されたとき、自分で弁解できないことではないのでしょうか。周りの人は、気持ちが伝えられなくて、どんなに辛いだろうということについては考えてくれますが、言い訳できないことについてはどうでしょう。本当は、やりたくないのにやってしまう、言いたくないのに声が出る、謝りたいのに謝れないなど、自閉症者の言動は、誤解されてしまうことだらけです。弁解できない状況ほど、苦しいことはありません。自閉症者は変わった言動をとるかもしれませんが、みんなと違う種類の人間ではないと思っています。善い人間だと信じて接してほしいのです。どうしようもない奴だと思われていると、それは本人にも伝わります。周りの評価で、その人の価値というものは、決まってしまうのではないのでしょうか。人の心を育てるのは、愛情です。

(1) 自閉症の特性について、著者が記載していることを書いてみましょう。

(2) 著者が文章の中で、周囲に分かってほしいと訴えていることを書いてみましょう。

(3) 著者の思いを知った上で、自閉症の方にどのように接したらよいか記入しましょう。記入した内容をもとにグループで意見交換をしましょう。

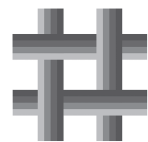
ワーク 3

- (1) ワーク 1・ワーク 2 をとおして、障がいのあるなしに関わらず、誰もが居心地のよい社会とは、どのような社会でしょうか。記入した内容をもとにグループで意見交換をしましょう。

- (2) 「ともに生きる社会かながわ憲章」を確認し、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会の実現のために、わたしたちができることを考えて書きましょう。

ともに生きる社会かながわ憲章

- 一 私たちは、あたたかい心をもって、すべての人のいのちを大切にします
- 一 私たちは、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会を実現します
- 一 私たちは、障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します
- 一 私たちは、この憲章の実現に向けて、県民総ぐるみで取り組みます



ともに生きる社会
かながわ憲章
KANAGAWA CHARTER for an Inclusive Society

解説 障がい者の人権

1 ねらい

平成 28 年 7 月 26 日、津久井やまゆり園にて痛ましい事件が起きた。この事件を受け、平成 28 年 10 月 14 日に「ともに生きる社会かながわ憲章」が定められた。その中で「私たちは、障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します」とある。そのためには、私たち一人ひとりが先入観にとらわれることなく、様々な機会をとおして障がいに関する理解を深め、それぞれのできる範囲のサポートや付き合い方を考えていく必要がある。

ここでは、会話のできない重度の自閉症でありながら、パソコン等を活用して他者とコミュニケーションをとる東田直樹さんの著書から著者の思いにふれ、ともに生きる社会の実現のために、今の自分にできることを考える意欲や態度を育みたい。

2 進め方

展開例（50 分 3～4 人のグループを作る）

学習活動	指導上の留意点
1 ワーク 1 (10 分) ① 津久井やまゆり園事件について、知っていることを各自で記入する。 ② 解説を聞く。	○ 生徒や家族に当事者がいる可能性もふまえ、授業を展開する。
2 ワーク 2 (25 分) ① 各自で抜粋した文章を読む。 ② 当てはまる内容を書き出す。 ③ 各自で当事者への接し方について記入し、グループで意見交換をする。	○ 感じたままに記入するように促す。 ○ できるだけ多く書き出すように促す。 ○ 時間があればグループで話し合う。 ○ まわりの意見を共感的に受け止めるようにする等、互いの意見を尊重するように促す。
3 ワーク 3 (15 分) ① 各自の考えを記入する。 ② 各グループの意見を紹介し、まとめを行う。 ③ 「ともに生きる社会かながわ憲章」を改めて確認して、各自で自分たちができることを考える。	○ 感じたままに記入するように促す。 ○ 相手の気持ちに寄り添い、今の自分にできることを考えることは、一人ひとりの違いを理解し認め合う関係をつくることへつながることを強調する。 ○ 時間があればグループで話し合う。

3 解説

(1) ワーク 1 について

ワーク 1 では、「ともに生きる社会かながわ憲章」が定められた背景について確認することで、障がい者の人権について考えるきっかけとしたい。

平成 28 年 7 月 26 日、県立の障害者支援施設である「津久井やまゆり園」において 19 人が死亡し、27 人が負傷するという、大変痛ましい事件が発生しました。この事件は、障がい者に対する偏見や差別的思考から引き起こされたと伝えられ、障がい者やそのご家族のみならず、多くの方々に、言いようもない衝撃と不安を与えました。私たちは、これまでも「ともに生きる社会かながわ」の実現をめざしてきました。そうした中でこのような事件が発生したことは、大きな悲しみであり、強い怒りを感じています。このような事件が二度と繰り返されないよう、私たちはこの悲しみを力に、断固とした決意をもって、ともに生きる社会の実現をめざし、ここに「ともに生きる社会かながわ憲章」を定めます。

- 一 私たちは、あたたかい心をもって、すべての人のいのちを大切にします
- 一 私たちは、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会を実現します
- 一 私たちは、障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します
- 一 私たちは、この憲章の実現に向けて、県民総ぐるみで取り組みます

「ともに生きる社会かながわ憲章」神奈川県（平成 28 年 10 月）

(2) ワーク 2 について

ワーク 2 では、東田直樹さんの著書（抜粋）を読み著者の思いに触れることで、当事者の思いを大切に作る気持ちを育むきっかけとしたい。まずは、著者の思いや考えを各自でワークに書き出すことで、当事者の思いに寄り添う心を育み、感じたことや考えたこと、当事者の思いを知った上でどのような接し方をするかなどについて、グループで協議をして他者の意見を聞くことによって、より自分自身の考えを明確にしていってほしい。自分にとっては「なんで？」と疑問に思うような行動でも、当事者にとっては理由のある行動であることを強調し、それが相手を傷つけるような行動でなければ、まずは「見守る」などの付き合い方からでも良いことを伝える。

< 著者紹介 >

「自閉症の僕の七転び八起き」東田直樹（ひがしだ・なおき）。平成 4 年 8 月生まれ。千葉県出身。会話のできない重度の自閉症でありながら、パソコンおよび文字盤ポインティングにより、援助なしでのコミュニケーションが可能。小学 6 年生から中学 3

年生まで特別支援学校で学んだ後、平成 23 年 3 月アットマーク国際高等学校（通信制）卒業。第 4 回・第 5 回「グリム童話賞」中学生以下の部大賞受賞をはじめ、受賞歴多数。13 歳のときに執筆した「自閉症の僕が跳びはねる理由」（エスコアール）で、理解されにくかった自閉症者の内面を平易な言葉で伝え、注目を浴びる。同作は国際的作家デイヴィット・ミッチェルにより翻訳され、平成 25 年 7 月にイギリス版「The Reason I Jump」が刊行。Amazon. UK のベストセラーリスト 1 位にランクインし、アメリカ、カナダでも 10 万部を突破。現在 30 か国以上で出版され、世界的ベストセラーとなっている。他の著書に「あるがままに自閉症です」（エスコアール）、「風になる」（ビッグイシュー日本）、「跳びはねる思考」（イースト・プレス）、詩集「ありがとうは僕の耳にこだまする」（KADOKAWA）、絵本「ヘンテコリン」（エスコアール）など多数。北海道から沖縄まで全国各地で講演会を開催し、精力的に活動をしている。

<参考資料>

- ・自閉スペクトラム症（自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群、自閉症スペクトラム、高機能自閉症）のある子どもたちへの支援

個々の障がいの程度は連続体（スペクトラム）であり、区分することは難しい、知的発達や言語発達の遅れの程度等による分類は廃止されている。自閉スペクトラム症は、次の二つにより診断され、これらの症状は幼児期早期から認められ、日々の活動を制限するか障害するものとしている。

- ① 持続する相互的な社会的コミュニケーションや対人的相互反応の障害
- ② 限定された反復的な行動、興味、または活動

この子どもたちは、相手の気持ちや周囲の状況、雰囲気をやみとることが苦手なため、対人関係をうまく結ぶことができず、集団への不適応を示すことが多くなる。具体的な支援として、その日の予定や授業の予定など、見通しが持てると安心して取り組める。体育祭、遠足といった日常の学校生活と違う場面では、見通しが持ちにくく、不安が高まる場合があるので、事前に児童・生徒や保護者と話し合い、不安を軽減することが大切である。具体的な場面でどのように行動したり、会話を進めたりしたらよいかを丁寧に伝えていく必要がある。

また、感覚（聴覚、味覚、触覚など）の過敏さのある児童・生徒もいる。例えば、小さな音が気になって集中できない、特定の音が苦手、味や食感でどうしても食べられないものがある、決まった洋服しか着られないなどとして見られることがある。そういった児童・生徒には特性を理解しながら、少しずつ経験を広げることや、刺激の軽減、困難な状況になった時の望ましい対処方法を丁寧に教えるなどの支援が大切である。

さらに、多くの人が聴覚情報よりも視覚情報の方が比較的理解しやすいという様に情報の受け取り方に偏りがある。その特性をいかして活動できるよう配慮すると

学習活動に参加しやすくなる。具体的な支援方法としてよく知られているのが「構造化」である。構造化には、決まった場所で決まった活動を行う「場所の構造化」、始めと終わりを明確にしたり、次にやるべきことを提示したりする「時間の構造化」、学習や作業工程を写真などの視覚的手がかりで明示し見通しをもって行動できるようにする「作業の構造化」などがある。構造化とは個々の児童・生徒の特性を理解した上で、その児童・生徒が理解しやすい環境を設定するための工夫である。自閉スペクトラム症の特性の現れ方は一人ひとり異なる。そのため、学習能力や児童・生徒の長所、苦手とするところなど多様な方法でアセスメントし、その子どもに合った指導の手立てを工夫すること、日々の成長に合わせて、その内容を見直し、変えていくことが大切である。

「支援を必要とする児童・生徒の教育のために」 神奈川県立総合教育センター

（３）ワーク３について

ワーク３では、自分はもちろん、誰もが居心地のよい社会とは、どのような社会なのかを想像し、改めて『ともに生きる』に込められたメッセージを考え、自分たちとしての「ともに生きる社会」とはどのような社会なのかを意見を出し合う。最後に、誰もがその人らしく生活できる学校や地域とは、どのような空間であるかを共有しながら、障がいのあるなしに関わらず、一人ひとりが輝ける学級や学校にすることを伝える。

<引用文献>

- ・「ともに生きる社会かながわ憲章」 神奈川県 平成 28 年 10 月
- ・「自閉症の僕の七転び八起き」 東田直樹 著 株式会社 KADOKAWA
令和元年 10 月
- ・「支援を必要とする児童・生徒の教育のために」 神奈川県立総合教育センター
令和 2 年 3 月